

マルコによる福音書13章 「主イエスの再臨」

1A 崩れ去る栄華 1-2

2A 世の終わり 3-31

1B 産みの苦しみ 3-8

2B 迫害と宣教 9-13

3B 大患難 14-23

4B 天変地異 24-27

5B 来臨の徴 28-31

3A 分からない「その日、その時」 32-37

本文

私たちの学びはマルコ 13 章に入ります。イエス様は、11 章においてエルサレムに入城され、宮清めを行われました。それから、12 章にて、神殿を管理している宗教指導者から誘導尋問を受けましたが、かえって彼らを驚かせるかたちで返答し、彼らに対してむしろ質問することによって、彼らを黙らせてしまいました。そして神殿の敷地から出て行きます。その時に、イエス様が驚くべき発言を弟子たちに行われました。そして弟子たちに衝撃が走り、世の終わりについてイエス様に尋ねるのです。それでイエス様が、ご自分が天から地上に戻って来られる時までの徴を語られます。私たちは、イエス・キリストの十字架と復活、そして天に昇られたという昇天を信じています。けれども、それだけでは足りません。神の右の座に着かれたキリストが、そこから立ち上がって、地上に戻って来られることを信じています。



1A 崩れ去る栄華 1-2

1 イエスが宮から出て行かれるとき、弟子の一人がイエスに言った。「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」2 すると、イエスは彼に言われた。「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」

午前礼拝で話しましたように、ここでの弟子たちの衝撃はとんでもないものでした。こんなに荘厳

に、栄華輝く神殿が、ほぼ半永久的に続くのではないか？と思われる建物が、石が積み上げられたままに残ることはないといエス様は宣言されたのです。それが今のエルサレムに行くと遺跡がないことによって、確認できるのです。普通、遺跡によって確認しますが、遺跡がむしろ残っていない、つまり完全に神殿が破壊されたことによって確認します。その詳しいことについて、午前礼拝でお話ししましたので、ぜひ聞いてください。



これは、紀元 70 年に起こりました。イエス様は何度となく、「この時代」という言葉を使われました。不信仰な時代のことを指していて、それは「世代」とも訳せるものでした。主が到来された時が満ちたのに、それを受け入れなかったことによって、神の裁きを受けることをイエス様は説かれていました。事実、紀元 30 年頃に語られたイエス様の言葉は、40 年後の 70 年に、ローマ総督ティトスによって実現したのです。

どんなに頑強に見えるようなものであっても、本当に大切なことは、「人は神の前に生きているのか？」ということなのです。人が罪の中に留まっているのであれば、どんなにすばらしく見えるものであっても、必ず崩れ去るのです。神殿で仕えていようと、彼らはイエス様にご指摘されたように、偽善の生活をしていました。真実に生きていませんでした。キリストを拒みました。宗教とて、人を救うことはできないのです。ペテロが第二の手紙でこう言いました。「3:10-11 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょう。」

2A 世の終わり 3-31

1B 産みの苦しみ 3-8

3 イエスがオリーブ山で宮に向かって座っておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひ

そかにイエスに尋ねた。4「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。また、それらがすべて終わりに近づくときのしるしは、どのようなものですか。」

宮から離れて東に行けば、そこにはケデロン谷があります。そしてオリーブ山があります。そこに後に、悶え苦しんで祈られるゲッセマネの園がありますが、イエス様はオリーブ山に向かって座っておられました。それはまるで、主ご自身がエルサレムに立ち向かっておられるようであり、確かに神が裁きを下されることを象徴しているかのようです。そこに、秘かにペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてアンデレが来ています。いつもの三人だけでなく、ペテロの兄弟のアンデレも来ています。これはあまりにも衝撃的なことであり、誰にも知られないようにして尋ねました。イエス様も個人的に教えられます。

彼らがなぜ、神殿の破壊の予告によって、終わりの近づいていると考えたのか？普通の感覚でも、これだけ永続するようなものがもの見事に破壊されてしまうのであれば、それは神の力強い訪れであり、世の終わりなのだと思うことでしょう。そしてゼカリヤ書14章には、エルサレムが国々によって攻められてから、そして主が来られることが預言されています。「14:1-3 見よ、【主】の日が来る。あなたから奪われた戦利品が、あなたのただ中で分配される。「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」【主】が出て行かれる。決戦の日には戦うように、それらの国々と戦われる。」そして次の節には、主がオリーブ山に立たれるということが書かれています。このことを弟子たちは考えていたのだと思います。今、主が神殿に向かって座っておられて、石が積み上げられたまま残ることはないと宣言されたのは、エルサレムが国々によって攻められるが、ご自身がここオリーブ山に戻って来られることを思って語られたのだろう、と思ったのでしょう。

5 それで、イエスは彼らに話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそ、その者だ』と言って、多くの人を惑わします。7 また、戦争や戦争のうわさを聞いても、うろたえてはいけません。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで地震があり、飢饉も起こるからです。これらのことは産みの苦しみの始まりです。

イエス様は弟子たちに、終わりの時に起こる徴を語られる前に、徴ではないことを語られます。そしてそれらがあたかも徴であるかのように言う者たちや噂に惑わされることがないように気をつけなさい、と言われます。終わりの日の特徴の一つは、「惑わし」が多いということです。私たちは簡単に、嘘や惑わしに振り回されます。地震や災害の後に、デマ情報が沢山流れますね。その時にいかに正しい情報を掴むかが大事なのですが、人はどうしても惑わされやすいものです。それでイエス様ははっきりと、これこれ終わりの徴ではないと語られます。

一つは、多くの「偽イエス」が現れることです。キリスト者にとっては、人がどうして自分自身をイエス・キリストであると言いのけてしまえるのか、そこまで恐ろしいことができてしまうのか？と思うのですが、いや、できるのですね。私もその脳内構造がどうなっているのか？想像すらできませんが、しかし現実としてそういった者たちが出てくるのです。比較的最近で、私たちの身近な人たちは、統一協会の文鮮明、そして摂理の鄭明析です。どちらも、初めは正統的なキリスト教のキリスト教徒として生きていました。だからこそ、どうしてそうになってしまうのか？と思うのですが、惑わしの力は強く働いているのです。

もう一つは、「戦争や戦争のうわさ」であります。これも人間の歴史の中で、戦争がなかった平和の時期のほうがむしろ少なかったのです。けれども、戦争や戦争の噂を聞くと、これで世の末だと思ふかもしれませんが、それらは人間の罪の結果として起こっていることであっても、終わりの徴ではありません。

しかし、イエス様は、「産みの苦しみの始まり」としている徴があります。主が来られるにあたって、その痛みと苦しみの始まりと言える徴です。それは、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」というところにあります。他の聖書箇所を見ると、この表現は全面戦争であり、世界的な全面戦争のことを指しています。戦争といえば、民族主義や国家主義によってもたらされるものが多いですが、それが世界規模で起こっていることを指しています。ですから、私たちは背筋を真っ直ぐにしないといけません。既にこれは過去のものになりました。二つの世界大戦を前世紀の始めに私たちは経験しました。間もなく平成が終わりますが、今上天皇が生前退位の言葉を述べられた時に、ご自身の時代に日本が戦争をすることがなかったのでほっとしているというようなことを、言われていました。世界大戦における痛みと悲しみを二度と繰り返したくないという強い思いです。

そして、「あちこちで地震があり、飢饉も起こる」ということも経験しています。大規模な地震は、過去、人類の歴史で起こったことを全て足しても、前世紀で起こった地震のほうがはるかに多いし、今世紀に起こった地震は前世紀に起こった地震よりも、はるかに頻度が多く、規模も多くなっています。さらに、飢饉も、これだけ飽食の時代になっても世界中で人災とも言えるほど、飢饉が起こっています。

イエス様は、終わりの日を「産みの苦しみ」と呼ばれています。エレミヤが、主の恐ろしい日が来る時に、勇士までが産婦のように腰に手を当てているのを見ると預言しています。けれどもこう預言しています。「30:7 それはヤコブには苦難の時。だが、彼はそこから救われる。」恐ろしい苦難ですが、そこから救われるという希望があります。産みの苦しみというのは、その通りですね。赤子が産道を通っている時の痛みはとてつもないものですが、出産すればこれまでの苦しみを忘れてしまうほどの喜びに包まれます。これが、私たちキリスト者の終末観です。私たちは、世の終わりの時に世の人と同じように悲しみに沈んだり、嘆いたり、押しつぶされたりするものではありません。その後、輝かしい希望があることを期待して、今の苦しみに耐えるのです。

それからこの「苦しみ」の言葉は、陣痛と同じ言葉が使われています。陣痛は、その痛みは断続的に来ます。持続ではなく、ある時に痛み、またその痛みが止みます。しかし、間隔が狭くなり、その痛みも激しくなります。そして出産の時に痛みが最高潮に達します。終わりも同じような流れで進みます。どんなに酷い災害でも、人は喉元過ぎれば熱さを忘れず。そして心が頑なになるのです。ファラオのことを思い出してください、かえるの災いによって、主に取り除くことを祈ってくれと願い、モーセはそのようにしましたが、息つくことができたら、また強情になりました。そして、災害は極みに達していくことになります。

2B 迫害と宣教 9-13

9 あなたがたは用心していなさい。人々はあなたがたを地方法院に引き渡します。あなたがたは、会堂で打ちたたかれ、わたしのために、総督たちや王たちの前に立たされます。そのようにして彼らに証しするのです。10 まず福音が、すべての民族に宣べ伝えられなければなりません。11 人々があなたがたを捕らえて引き渡すとき、何を話そうかと、前もって心配するのはやめなさい。ただ、そのときあなたがたに与えられることを話さなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。

「あなたがた」と言われて、弟子たち自身の個人的な注意を与えておられます。それは、福音宣教をするにあたって、必ず人々が迫害をするということです。地方法院というのはユダヤ人の機関ですが、それに引き渡され、会堂でも打ちたたかれます。そしてローマからも迫害を受けます。総督や王たちの前に立ちます。使徒の働きを読めば、これらのことがそのまま起こりました。人々の罪は、このように福音宣教の中でますます露わにされていきます。

しかし、ここで大事なのは、「まず福音が、すべての民族に宣べ伝えられなければなりません。」ということです。迫害があるから、福音が伝わらなくなるのではなく、むしろ困難と共に福音が伝わっていくのです。これが神の方法です。「ロマ 5:20 罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。」とあります。この逆説的に思われるようなことが、福音であります。福音とは、失われた人を、羊飼いが羊を捜すように探すことです。当然ながら、罪が満ちているところに、その暗闇に光が輝きます。ですから、私たち教会では、いや世界の全ての教会で、世界宣教のために、そして迫害されている兄弟姉妹たちのために祈るべきなのです。そして、そうした迫害の話を知れば、それは主が戻って来られることが近づいていることを示しているのだと知る必要があります。

興味深いことを、イエス様は語られています。「話すのはあなたがたではなく、聖霊です。」ということです。自分が福音に立って語る時に、どう語ればよいか分からないかもしれないが、聖霊が教えてくださるということです。これは私たちキリスト者全般に言えるでしょう。キリストを心の中で主とすることには、いつも何を言えばよいか迷います。例えば、どうしてお墓の前でお線香をあげないのか？と尋ねられたら、どうやって答えますか？しかし、主はご自身を主としていく者たちは、確かに聖霊の力と知恵を与えてくださるのです。

12 また、兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせませす。
13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

世の終わりには、最も基本的な社会の単位である家族にさえ殺人が起こるといふ有様です。アダムとエバの息子カインが弟を殺すという罪は、終わりの日には一挙に増大します。そしてイエス様のこの言葉は、信仰のゆえに兄弟たちから、また父から、また子供たちから殺されるかもしれないという意味合いも含まれているでしょう。「マタ 10:34-36 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。」

そして、信仰者は世に憎まれます。このことも実感するのではないのでしょうか？これが、政府が宗教を弾圧しているような国であれば理解できるのですが、キリスト教の信教の自由を守るために建てられたアメリカでさえ、今、その自由が踏みにじられている場面が出てきている状態です。「すべての人に憎まれます」というのが大事です。どんな人であっても、その人が思想的に左であっても右であっても、だれであってもイエス様の名にあっては、一つになって敵対します。

そしてイエス様は、「最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」と言われていました。これは、主が戻って来られる時に与えられる救いです。キリスト者はすでに救われました。けれども、その救いが完成するのは、これからであり、主が来られる時です。ですから、私たちの信仰の姿勢は、「最後まで耐え忍ぶ」ということです。初めは信仰に満ちていても、どんなに熱心であっても、それよりも主に対して忠実であること、そして最後まで忠実であることが求められています。

3B 大患難 14-23

そして次から、イエス様は非常に細かく、終わりの日についての出来事を語られます。

14 『荒らす忌まわしいもの』が、立つてはならない所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。15 屋上にいる人は、家から何かを持ち出そうと、下に降りたり、中に入ったりしてはいけません。16 畑にいる人は、上着を取りに戻ってはいけません。17 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。18 このことが冬に起こらないように祈りなさい。19 それらの日には、神が創造された被造世界のはじめから今に至るまでなかったような、また、今後も決してないような苦難が起こるからです。

ここでイエス様は、「読者はよく理解せよ」と言われています。マタイは、はっきりと預言者ダニエルが語っている、「荒らす忌むべき者」であると言っています。イエス様は、ダニエル書にある、荒らす忌むべき者について、しっかりと理解して、これこそが大患難をもたらす人物なのだご指摘

になっているのです。今、終わりの日に起こる特徴として、全面的な戦争、地震、飢饉が産みの苦しみとして見ました。次に、迫害とそれともなう世界宣教があることを見ました。

そして三つの目の特徴は、「イスラエル」です。歴史を見れば、紀元 70 年に神殿が破壊されて、それから存在していなかったのに、今、ここでは荒らす忌むべき者が、立ってはならないところ、つまり神殿の至聖所に立っているということ、そしてユダヤにいる人たちが逃げるとのこと、つまりイスラエルが存在して、神殿も建てられているところで、この出来事が起こることが分かります。そこで私たちが置かれている時代が、終わりの日の兆しが強いとされているのはそのためなのです。私たちは戦争が起こると世の末だとなりますが、イスラエルが約束の地に興されていると、終わりは近いとならないといけないのです。

ところで、「荒らす忌むべき者」とは、一体何なのでしょう？これは、ユダヤ人がバビロン捕囚から帰還して再建した神殿を荒らし、忌むべき物を置いた人物が歴史上に現れることを、ダニエルが預言した部分です。ギリシアの王アンティオコス・エピファネスがいました。彼は徹底的にユダヤ人のギリシア化をしました。ユダヤ教を根底からなくしてしまおうとしたのです。神殿にはゼウス像を立て、祭壇には豚を捧げさせました。赤ん坊に割礼を受けさせるものなら、赤ん坊も母親も虐殺です。このような、荒らす忌むべきことを行なったのですが、マカバイ家の勇士たちが戦い、神殿を 2300 日ぶりに清めることができ、その奉獻祭をハヌカーと呼びます。ちょうど、クリスマスの時期です。

そしてダニエルの預言は、アンティオコス・エピファネスに終わりません。そのギリシアの王が原型となって、世界中に荒廃をもたらす人物が現れることを予見したのです。彼は、ユダヤ人と堅い契約を結び、そして神殿を建てるのを許すのですが、半週、つまり三年半後に、いけにえと捧げ物をやめさせます。それが書かれているのが 9 章 27 節、そして 11 章 36 節から、「彼が、どんな神々も心にかけない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。」とあり、彼自身が神として人々に自分を拝むことを強要するのです。

この荒らす忌むべき者は、他の呼び名もあり、パウロは不法の人、あるいは罪の人と呼び、ヨハネは第一の手紙で反キリスト、黙示録では「獣」と呼んでいます。初めに、神殿が破壊されるといふ衝撃的な出来事が起こるのは、人の罪のためであると話しました。罪を犯している者が高慢になり、平然と罪を犯し、なんとその罪を聖域の中に入れて偶像化していくのです。けれども、今の世においても、この反キリストの霊は働いています。罪を公然と認めるだけでなく、他の人々にその罪を押し付け、自分自身は宗教や教会の中心にいる、というようなことです。

パウロが、どのようにこの人物について警告しているか見てみましょう。テサロニケ第二 2 章 3 節からです。「Ⅱテサ 2:3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。4 不法の者は、

すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。5 私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか。」つまり、パウロはイエス様のオリーブ山での話を知っていて、しっかりとダニエルの預言について教えていたのです。「6 不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。7 不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」この引き止めている者とは、地の塩である教会であります。悪の力が抑制されているのです、けれども、取り除かれる時がきます。教会の携挙です。「8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。9 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、10 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。」イエス様が 21 節以降で語られますが、あらゆる惑わしの徴がその時には飛び交います。「11 それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。12 それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」そうです、なぜ偽物を信じるのか？それは本物を拒んだからであり、残りは偽物ではないからです。福音の真理を敢えて拒めば、惑わしを受け入れてしまいます。

そして、ここで大事なものは、どこでこれが起こるか？ということです。「ユダヤ」にいる人たちです。これを抽象的に解釈することはできず、そのまま、ユダヤ地方にいる人々なのです。屋上にいる人たちとありますが、これは彼らの家の屋根は平らであり、そこでいろいろな活動をしているからです。そして、まるで津波が襲うかのように、下に降りないで、屋根から屋根へと移りなさい、下に降りて荷物を取りに行かないようにしなさい、身重の女は悲惨です、と、生々しい津波のように襲う反キリストによる攻撃と殺害が始まるということです。冬に起こらないように、と言っているのは、イスラエルは冬が雨季であり、道がぬかるんだり、川の水かさが増します。逃げて走るのが遅くなるからです。まるで日本で予測されている巨大地震であるかのように、イエス様は、反キリストの現れは必ず起こるもので、速やかに襲うものであることを警告しておられます。

そして、彼が正体を現した後で、前代未聞の大患難が世界を襲うということでもあります。これは、何度も何度も、預言者たちが語った主の日のことであり、預言者たちだけでなくイエス様ご自身が警告し、今、パウロが書いたところを読んだように、使徒たちも警告していることです。ですから、必ず起こるのです。

20 もし主が、その日数を少なくしてくださらなかったら、一人も救われられないでしょう。しかし、主は、ご自分が選んだ人たちのために、その日数を少なくしてくださいました。21 そのときに、だれかが、『ご覧なさい。ここにキリストがいる』とか、『あそこにいる』とか言っても、信じてはいけません。22 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちを惑わそうと、しるしや不思議を行います。23 あなたがたは、気をつけていなさい。わたしは、すべてのことを前もって話しまし

た。

ここで、主は選ばれた人々のために、救いを遅らせることはないことを語っておられます。ここで主が語られているのは、民族的に選ばれた民のこと、つまりイスラエルの残された民のことを話しています。逃げまどっている人々のことをイエス様は話しておられるので、イスラエル人で残された民のことです。この人々はその苦難の中で救い主、キリストを求めます。しかし、そこに何とかして彼らを主なる神に立ち返るのを妨げるべく、彼らを惑わす偽キリストや偽預言者がでてくるといふことです。不思議なことを行って惑わします。切羽詰まっている時は、人は、藁をもすがる思いですから、不思議や徴に惑われやすくなります。けれども、そうしたことが起こっても、それを鵜呑みにしてはいけません。

4B 天変地異 24-27

24 しかしその日、これらの苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、25 星は天から落ち、天にあるもろもろの力は揺り動かされます。26 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。27 そのとき、人の子は御使いたちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者たちを四方から集めます。

午前礼拝で話したように、イエス様が神殿は跡形もなくなることを語られたところに、この方の言葉の力を知ることができました。そしてここでは、天と地が過ぎ去るような天変地異でさえもが、主の語られた通りになるということです。これこそが、産みの苦しみが最高潮に達する時であります。その時に救いが天から来ます。イエス様が天から地上に来られます。ここで語られている「選ばれた者たち」は、イスラエルの民のことです。世界中に離散している民が、主が戻って来られる時に最終的に集められます。「イザ 11:12 主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。」

イエス様の姿は、「雲のうちに」「偉大な力と栄光とともに」だということです。覚えていますか、主の幕屋についても、ソロモンの神殿についても、中が雲に包まれて、祭司たちが入ることさえできなくなりました。またシナイ山では、天から主が降りて来られた時に、黒雲に包まりました。その雲は、孫悟空のような乗り物のようなものではなく、神の栄光が満ちている姿であります。そして、偉大な力と栄光と共に来られるのです。主はへりくだったしもべとして世に仕えてくださいましたが、神はそれゆえにこの方を死者の中から甦らせてくださり、この方の栄光と力を示されたのです。そして、その栄光と力をもって天から地上に臨まれます。

私たちは、主がへりくだった僕の時に、その愛に感激し、その恵みによって救われるのです。しかし、その憐れみをないがしろにするのであれば、残されているものは恐ろしい神の怒りしかないのです。多くの人が、神の恵みを神の弱さ、神の無力さであると勘違いしています。その忍耐を弱さとみなして、頑なに拒んだら、

5B 来臨の徴 28-31

28 いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。29 同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。30 まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。31 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

いちじくはイスラエルの地域で、夏になって実を結ばせる植物です。非常に新鮮ないちじくの実を市場で買うことができます。だから彼らにとって、いちじくの木が柔らかになること、葉が出てくることは、夏が近づいたと実感させる風景でした。同じように、これまでイエス様が語られたことが見え始めたら、世の終わりが近づいたと知りなさいと言われているのです。また、いちじくの木はイスラエルそのものの象徴です。ここで、「この時代が過ぎ去ることは決してありません」と言われていますが、「この世代」とも訳すことのできる言葉です。つまり、イエス様の時代に生きていたユダヤ人の世代は、決して過ぎ去ることはないということです。イエス様を受けいれて、救われるという実を結ぶ時まで、この人たちは必ず過ぎ去ることはないということです。

聖書を解き明かす人たちの中には、これらのことはみな過去に起こったのだとする人たちがいます。また、そのようなことをはっきりと言わない人でも、これらのことはもう過ぎ去ったことであり、今の我々には関わりはないとします。イスラエルやユダヤ人のことを過去の聖書の民であるとして、今も生きている聖書の民とはしません。しかし、今、イスラエルやユダヤの民が注目を集めるようになったのは、主が来られるのが近づいているからです。

そしてイエス様の驚くべき言葉です、「天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」ということです。であるならば、私たちはなおさらのこと御言葉をしっかりと受け入れて、それによって成長しなければいけませんね。このことばは、天地が過ぎ去ってもそれでも残るのです。ですから、私たちがイエス様の言葉を守っているなら、最後まで忍耐する力も与えられるのです。

3A 分からない「その日、その時」 32-37

32 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。父だけが知っておられます。33 気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたは知らないからです。

ここから、イエス様の警告ががらっと変わります。とても矛盾しているかのような発言をされています。これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に來たのを知りなさいと言われているのに、ここでは、「だれも知りません」とあります。ここでイエス様は、ご自身が来られるのに、全く前触れもなく来られるということと、いろいろな徴をともなって来られるということとをどちらも語っておられま

すが、新約聖書を眺めると、イエス様が来られるのに二段階があることが見えてきます。一つは、天から空中まで来られて、死んだキリスト者が生き返り、生きている者たちも引き上げられる携挙です。もう一つは、天から、栄光の姿に変えられた教会と共に降りて来られて、地上に戻られるイエス様の再臨です。前者は何の前触れもなく、いつ来るかもわかりません。後者は、徴が伴ってその最終の時に来られます。

ですから、携挙は患難時代の前に来るのです。携挙の前に、いかなる徴も置いてしまっは、いつ来るか分からないという言葉が意味をなしません。主は今日、来られるかもしれないということで、用意しなければいけません。

34 それはちょうど、旅に出る人のようです。家を離れるとき、しもべたちそれぞれに、仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているように命じます。35 ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰ってくるのか、夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、明け方なのか、分からないからです。36 主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見ることがないようにしなさい。37 わたしがあなたがたに言っていることは、すべての人に言っているのです。目を覚ましていなさい。」

最後に、主が来られることを待つということは、結局、今、主に仕えていることへの心を整えます。イエス様はずっと神の僕として生きて来られましたが、私たちがこの方に倣って、この地上で主に仕えている時に、主人から良いと評価されるのかどうか？が問われています。そしていつなのか分からないから、いつでも準備していなさいということです。先日、葬儀を執り行わせていただいた時に、その突然の意味がよく分かりました。そして用意をいつもしていないと、いざというとき準備ができてないという問題があります。主が来られるのも突然です。今、用意しておられるでしょうか？恥ずかしくないでいられるでしょうか？家に突然の客を迎えてもいのように、初めから用意ができていますでしょうか？